

環境を見つめる小学校社会科学習

—「西目の水源」学習にみる子どもの追究過程を手がかりとして—

西目町立西目小学校 戸賀瀬晃久

1. はじめに

環境教育は、教育界において、これまでにない高まりを見せている。

しかし、これまでの環境教育の実践をふり返ってみると、既成の学問の枠組みで環境問題を取り上げ、その見方考え方をそのまま子どもに獲得させることに終始し、子どもが環境や環境問題をどのように認識し、どのように対処していくかという、学習における問題解決の過程については、なおざりにされてきたのではないだろうか。

環境そのものを子どもの思考や生活と関連させ、学習における問題解決の過程で、環境や環境問題に子どもがどのようにかわろうとしているのか授業を通して明らかにしようとした。

2. 授業実践から

(1) 題材について

題材としたのは、秋田県由利郡西目町の水源としての「溜池」である。水源に恵まれなかった同町において、先人が他町と交渉した末に水源池を確保し開発を進めてきた歴史を持ち、なおかつ、現在の同町の住民の農業用水や生活用水として使用され、今や同町の住民にとって不可欠な存在となっている特質を持つ。そして、水資源の有効利用の観点からパイプライン灌漑、小水力発電、水の反復利用を行っている。しかも、未だもって安定的に水を供給できる水源となっていないために、同町では新たな水源池の開発を模索している。

この「溜池」を題材とした理由は二つある。第一に、歴史的な存在としての「溜池」が子どもの生活と密接に関連する問題を提示しうるものであること。第二には、「溜池」をめぐる歴史的事実とこれまで漠として存在していると認識している子どもの意識との格差が大きく、授業によってこの格差を縮めて行く過程で西目の地域的環境や地域の人々の動き、地域の人々の生き方を子ども自身の問題として追究できる可能性を持っているこ

とである。

何よりも、この学習を通して、子どもが「溜池」の存在と出会い、見つめていく中で、地域の環境と地域に生きる人間の営みが見え、人の働きや人間としての生き方に触れてくる子どもが育つことを願って授業を進めていった。

(2) 授業実践を通して明らかになったこと

第一に、環境や環境に関する問題は、常に子どものまわりに存在する。言い換えれば、その問題と必然的に出会うことが可能なのであること、だが、第二に、子どもがその問題を意識しないことには問題でなくなり、ただの一般的な事象の一つとして見過ごされることになること、第三に、それらの問題へのかかわらせ方は、子どもの身近な事象を子どもの生活経験とかかわらせていくことで、子どもは自分の問題として意識すること、第四に、このように意識した問題は、自分の問題として子どもに認識され、それが追究の力となって現れていくこと、つまり、第五に、子どもが「環境」を意識する契機となるのは、自分の経験や生き方と深くかかわって、「環境」に関する切実感が子どもに生じたときである。

このように結論づけたとき、環境や環境の問題の解決のための知識の伝達だけではなく、子どもの経験や生き方とかかわらせた、いわば「子どもの視点に立った」授業を展開することが求められているのではないかと考える。そのためには、学習者である子どもの主体性を確保しなければならない。学習者である主体性、すなわち「傍観者として教えてもらう」から「主人公として考える」ことへ授業展開がなされなければならない。

一定の結論を教師側が押しつけてしまったり、または「いろいろあって大変だな」という他人事のような立場に子どもを立たせてしまったりするということではあっては、切実な環境観は子どもに身につくことができないのではないかと。

子どもの身のまわりに存在する環境や環境問題を見つめていくときに、環境は漠として存在するのではなく、自分を含めた環境であることをどう伝えていくか、環境教育の授業のあり方が改めて問い直されている。